L1 と L2 の意味の違いと学習者の認識

高麗大学校　中日言語文化事業団研究教授
白　以　然

本発表は日本語の複合動詞後項「～出す」と韓国語の対応語である「～내다」の意味の差を見せ、それが韓国語を母語とする学習者の認識にどのような影響を与えるかについて分析したものである。

日本語の複合動詞は、習得の難しい項目として挙げられ、多くの研究から学習者が上級になっても複合動詞を使いこなすことに困難を感じていることが報告されている。本発表で取り上げる「～出す」は頻度の高い代表的複合動詞であり、韓国語にも似ている対応語「～내다」が存在する。両語ともに具体的で物理的な「外への移動」を基本義とし、それが抽象化され、「顕在化」の意味に転じ、さらに時間のアスペクトへと拡張する共通点を持っている。しかし、アスペクトとして「～出す」は「開始」、「～내다」はその反対とも言える「完遂」を表す。本発表では、認知意味論のイメージ・スキーマを用いて、空間概念が時間概念へ転ずる過程を説明し、両語の差を「外への移動」を眺める視点の違いによると分析する。外への移動を外部の視点から眺めるなら、何か新しい物事の出現、開始として、内部の視点からなら対象が自分の領域から消える、終了する意味として捉えられるのである。

では、こうした両語の差が韓国語を母語とする学習者の「～出す」の概念に影響を与えられるか。 L1 の影響は統語に比べ音声や意味の領域で根強いと言われる。サピアー・ワーフ仮説のように、L1 が世界を見る目や考え方を決めるまでは言わなくても、L1 は人の概念に影響を与える可能性が高く、母語で形成されている概念は L2 の習得時にもある程度転移されることが予想される。

それで、日本語母語話者、韓国語母語話者、そして、似ている動詞「出」を持っているが、時間的なアスペクトとしては使わない中国語母語話者を対象とした調査を行った。調査方法は文判断テストで、「～出す」が使われる普通の文と、日本語母語話者は受け入れないことが予想される韓国語の完遂用法を日本語に直訳したものが混ぜてあった。その結果、対照群である中国人の学習者に比べ、韓国人の学習者は全体の受容度が有意に(1%水準)高く、L1 の影響が窺えた。レベルが上がるにつれ、L1 に頼る傾向が弱まり、上位群は下位群に比べ、日本語母語話者の判断に近づいていくが、中国人学習者の上位群とは差が見られた。しかし、母語の直訳であるすべての「完遂」文を韓国語母語話者が受容していたわけではない。「～出す」の意味が移動や創出に関わるものはより受容される傾向があり、「耐え出す」「やり出す」など純粋な「完遂」の受容度は低かった。これは、前者に関しては移動の意味としても解釈できて翻訳可能、後者に関しては韓国語のみの表現で「言語特殊」であるという意識を持っていたからであると考えられる。